

今年のソメイヨシノは例年より早く咲き早く散り、4月は早や新緑の候。気持ちの良い季節です。

現在会員登録数 4,058 人さま。次号は5月20日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》【新連載】宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

■ ----- ■  
【1】お知らせ

● 第153回 日本児童文学学会 関西例会

日時：5月20日（土）13：00～16：15

講演「子どもの文学・文化研究に携わって」畠山兆子（梅花女子大学名誉教授）

ほか研究発表2件

場所：大阪府立中央図書館 多目的室 参加費：無料 定員：60人

主催：日本児童文学学会関西例会 共催：IICLO

※詳細・申し込み → <https://peatix.com/event/3548755>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

\*年間1万円以上ご寄付いただいた方には、イクロちゃんグッズをプレゼントしています。

※詳細は → [http://www.iiclo.or.jp/donation\\_10th.html](http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html)

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → [http://www.iiclo.or.jp/ml\\_youtube/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html)

● 当財団公式 Twitter → [https://twitter.com/IICLO\\_News](https://twitter.com/IICLO_News)

■ ----- ■  
【2】コラム

\*\*\*\*\*

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Jun's Talk

\*\*\*\*\*

『自分疲れ ココロとカラダのあいだ』頭木弘樹/著 香山哲/装画・本文イラスト 創元社 2023年4月 対象年齢：中学生以上

\* 今回のゲストは当財団特別専門員で、武庫川女子大学の遠藤純（J）さんです。

概要：文学紹介者で、20歳のときの難病にかかって、13年間の闘病生活を送った著者が、「自分」とは「心」なのか「体」なのかという問いについて、自身の体験や文学作品、映画、マンガを引用しながら考える本。

Y：わかりやすさが大事と言われているこのごろですが、「わからなさ」を大切に作るシリーズ「あいだで考える」が出ました。

J：その中でも、第一巻は、思春期なら誰もが悩むココロとカラダのちぐはぐさの中で、「自分」とは何かを考える本です。といっても、抽象的な言葉で考えられているのではなく、具体的な文学作品やマンガ、映画などの引用を通して「ココロ」と「カラダ」の関係を考えていくところがわかりやすくおもしろかったです。

Y：いわゆるよくあるブックリストは、あらすじや、おすすめメッセージがあって、「読んで！」という著者の思いがあふれていますが、この本は、著者の思考に沿って、「そういえば」という感じでいろいろな本が引用されていて、押しつけがましくなく、本に興味を持てる紹介のされ方がおもしろいと思いました。

J：なるほど。本の紹介とともに、著者の経験が語られていることで、説得力があります。私が普段接している大学生にぜひ、紹介したいと思いました。もちろん、悩んでいる中（ちょっと難しいか？）・高校生にも出会って欲しいです。

Y：「自分」は「カラダ」と「ココロ」の間にいるというのは、私にとっては、納得という感じでしたが、「ロボットに内蔵がなくて、人間にあるとしたら、ロボットとはちがう人間らしさとは、まさに内臓にあるということではないだろうか？」という指摘は目からウロコでした。あとは、人間の弱さを大切にするという主張や、「自分」は「カラダ」と「ココロ」の間に加えて社会の評価の中にあるということも共感しました。

J：「心と体のあいだは「グラデーション」という指摘も若い世代には新鮮なのではないでしょうか。正しさや唯一の答えを求めないことで、「自分疲れ」から解放されるというのは、自分についても、学生を見ていると感じることであり、この本を読んで、一人でも、「まあいっか」と思えたらいいなあと思いました。

Y：イラストも刺激的で、文に挑戦している感じがおもしろいと思いました。シリーズはどんどん続き、気になる著者がいっぱいいます。楽しみに読みたいと思います。

創元社 シリーズ「あいだで考える」特設サイト

<https://www.sogensha.co.jp/special/aidadekangaeru/>

\*\*\*\*\*

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

第92回「床屋」

## 「脱走者」の夢

床屋と客の対話形式の作品で、四つの部分に分かれていますから、四幕のこぢんまりとした戯曲のように見えます。

副題は「本郷区菊坂町」。1921（大正10）年、宮沢賢治が無断で上京して、半年あまり菊坂町で間借りしていたころのことが題材になっているのでしょう。賢治は、1月23日の夕方、突然、花巻の家を出て、青森発上野行きの東北線にとびのります。24日朝には東京に着き、その日のうちに、「突然出京致しました／進退谷まったのです」と友人の保阪嘉内あての葉書に書きつけています。賢治は、まず、入会していた「純正日蓮主義」の宗教団体、国柱会本部をたずねます。下宿で寝起きして、午前中は東大赤門前の小さな謄写印刷の出版社で座りきりの製版の仕事をし、午後は街頭での布教や国柱会での奉仕活動を行います。それでも、この時期の書簡などから見ると、賢治は、ずいぶん元気で、「東京への脱走者」の解放感があつたようです。「東京への脱走者」の解放感とは、これより前、賢治が20歳の夏に上京して、ドイツ語の講習会にかよっていたときに詠んだ短歌に寄せた入沢康夫のことばです（入沢「東京」1983年）。

「九時過ぎたので、床屋の弟子の微かな疲れと睡気とがふっと青白く鏡にかかり、室は何だかがらんとしている。」—「床屋」は、ト書きのような1行ではじまります。客は、子どものころに馬のバリカンで刈られた話をして、床屋に「お郷国」を聞かれます。—「岩手県だ。」客は、「僕はね、きっと流行るような新しい鬚の型を知ってるんだよ。」ともいいます。「今どこで流行っていますか。」と聞かれると、「アイデア界だ」。

「鏡の睡気は払われて青く明るくなり今度は香油の瓶がそれを受け取ってぼんやりなった。」「睡気が忽ち香油の瓶を離れて瓦斯の光に溶けて了い室が変に底無しの淵のようになった。」「瓦斯の灯が急に明るくなった。」というト書きで場面が転換していきます。この小さな四幕物全体が、ものうい夢のようです。これも、「脱走者」の解放感のつづきでしょうか。

この夢をやぶったのは、8月の故郷からの電報でした。妹のトシが病気だということです。賢治は、即座に帰郷します。国柱会の高知尾智耀にうながされて書きためたトランクいっぱい原稿をもって。（馬車別当）

（本文の引用は、新潮文庫『宮沢賢治万華鏡』によりました。）

\*\*\*\*\*

《3》子どもの本の珠玉のことば 46

\*\*\*\*\*

自由を夢みた。むちやくちな夢……

（『かべ 鉄のカーテンのむこうに育って』 ピーター・シス/作 福本友美子/訳 BL出版 2010年11月）

この本は、作者のピーター・シスが、「私はこれまでいつだって何でも絵にかいてきたのだから、家族のために、アメリカにくる前の人生もかいてみようと思った。この本の物語はそれをできるだけ忠実にかいたものである。」（あとがき）と書いているように、1949年に共産主義国であったチェコスロバキ

アに生まれたピーター・シスのアメリカ合衆国に行くまでの半生が描かれています。

生まれてからずっと絵を描くことが好きだったこと、成長すると戦車や戦争の絵を描いたこと、学校で教わったことに何の疑問も持たなかった時期から、少しずつ「おかしい」と感じ始めてこっそりと描きたい絵を描き、ロックバンドに夢中になったことなどが、絵と言葉と日記の引用と写真でつづられています。そして、1968年のプラハの春を迎えます。そこでの自由はカラフルな見開きの絵で表現されますが、そこから、ソビエト連邦ほかの東欧諸国がチェコスロバキアに侵攻します。そんな中、何度消されても壁に自分たちの夢の絵を描いた様子や、アニメーションを作って検閲官とやりとりをした日記が紹介され、引用の文の場面になります。

この場面は、8つの夢の絵が描かれています。列車の屋根に隠れて国境をこえる絵、頭の上にアヒルを載せて川を泳いで渡る絵、自転車にのって踏み台を使って壁を乗り越える絵、スキーをしながら、背中にパラシュートを背負って雪山からジャンプする絵、地下を掘り進む絵、夜、ハングライダーで空を飛ぶ絵、木の着ぐるみを着て、壁のところを歩く絵、棒高跳びの原理で、棒を使って鉄条網をこえようとする絵です。それらの絵の周りには道があり、警察が車で、絵を抱えて自転車に乗っているピーターを追いかけています。そしてページの上部には、針金が渡された柵があります。絵はユーモラスですが、絶望も感じます。ページをめくると、ことばはなく、自転車に乗ったピーターが絵を羽にして、柵をこえて飛び立ち、その姿を秘密警察と監視台の光が明るく丸く映し出しています。

そして、この絵本の最後は、「生きているかぎり、絵をかきつづける。」と終わります。今回読み直して、改めて、この作品は、自由とは何か、絵や芸術とは何かを問う作品だと思うと同時に、今の社会のありようともどこか重なるように感じました。(Y)

\*\*\*\*\*

《4》 行って来ました！

\*\*\*\*\*

市立伊丹ミュージアムで6月11日まで開催されている特別展「ピーター・シスの闇と夢」に行ってきました。この展覧会では、絵本作家ピーター・シスの原画、資料、新聞雑誌の挿絵、ポスターなど約200点が、「かべ」のなか「自由の国」「子どもたちのために」「探求の旅」「夢を追う」の5章に分けて展示されています。

最初に、『三つの金の鍵 魔法のプラハ』（柴田元幸訳 BL出版 2005年）『かべ 鉄のカーテンのむこうに育って』（福本友美子訳 BL出版 2010年）などの原画が展示されていました。解説には、1949年に生まれ、共産党統治下のチェコスロバキアで育ったシスの絵本には、彼の人生が反映されていると書かれています。『かべ』では表現の自由がなかった子ども時代から青年時代が語られていて、何度消されても壁にカラフルな絵を描く人たちの絵が印象に残りました。

シスは、プラハ工芸美術大学に進み、アニメーションを学びました。当時、チェコスロバキアでは、アニメーションは子どもの健全な育成のためという理由で比較的自由的な創作が許されていたようで、卒業制作のアニメーション「擬態」は、シュールで空想豊かなアニメーション映像でした。そして、アニメー

シヨンの作品が評価されたことがきっかけで、アメリカへ移住し亡命しました。

「子どもたちのために」の章では、『マドレンカ』（松田素子訳 B L 出版 2001 年）の原画がありました。子どもたちに伝えたい絵本を作っていたシスが、子どもたちが楽しめることも考慮に入れて作った作品群です。色が明るく、遊びの要素たっぷりの絵に心がはずみます。遊び心は、ミニサイズの箱付きの試作本からも感じられました。

「夢を追う」の章ではコロンブスやガリレオ、ダーウィン、サン＝テグジュペリなどの伝記絵本が紹介されています。どの本もその人の子ども時代から描かれています。一場面にいろいろなものが描き込まれていて、絵を読むことで、被伝者の興味関心や人生観などが読み取れるところがおもしろいと思いました。

アメリカへ移住するまで、シスはチェコスロバキアに閉じ込められ、自由を希求していました。そのことが、多くの絵に枠があり、その枠の外に自由な世界が広がっているというイメージとつながっているように思いました。原画で見ることによって、独特の色合い、細かい描写、指紋のような迷路のような丸い形などがより鮮明で、強く印象に残りました。(K)

市立伊丹ミュージアム <https://itami-im.jp/>

\*\*\*\*\*

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第1回 【新連載】

\*\*\*\*\*

第1章 坪田譲治先生

その1 「風の中の子供」

坪田譲治先生（1890～1982年）には、子どものころに2度お目にかかったことがあります。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/watashinodeatta-1\\_M152.pdf](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta-1_M152.pdf)

■ ----- ■  
【3】全国のイベント紹介  
■ ----- ■

● 「生誕100年・最後の抒情画家藤井千秋展」

会 期：開催中～7月9日（日） 月曜休館（5/1は開館）

場 所：姫路市書写の里・美術工芸館 観覧料：有料

主 催：姫路市書写の里・美術工芸館、神戸新聞社

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へ

お問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■  
【4】プレゼント

■ ----- ■  
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『自分疲れ ココロとカラダのあいだ』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ お送りください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/wTrFHBedaw4s3Bus9>

締切は5月10日(水)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

—」—」—」—」—」—」—」—」—」—」  
新たな年度が始まり、駅までの道や通勤電車の顔ぶれの変化にふと気づきます。集団登校の子どもたちの中にも、ランドセルがやたら目立つ一年生がちらほら。そんな新入生にあれこれ教えてあげている一つ年上の二年生の得意げな顔がおかしくて、思わず微笑んでしまいます。(TA)

-----  
みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html) パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

-----  
発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp